

お わ り に

45年間の教員生活の思い出を、「あ」から「ん」までの46字で始まる題名でまとめてみようと考えた私は、勤務した小・中・高等学校や教育委員会、所属した教科等の研究会や校長会での思い出をたぐり、話題を探してみました。それはいっぱいありました。しかし、そのどれもが楽しい思い出であったわけではありません。ほろ苦い思い出のものもありました。また、同じ文字が頭につくものばかりが思い浮かび、この文字から始まる題名がつく話はないのかと考え込んだり、「これも載せたい。このことも書いてみたい。どちらにしようか」と悩んだりすることもしばしばありました。しかし、なんとかこれを確定し、執筆にとりかかりました。

折々に書き残してきたものがパソコンのハードディスクに入っているとは言うもののうろ覚えのことも多く、「このことは確かあの本に出ていた筈だ」「あのときのメモは残っていないかな」と書棚を探しました。「あれはいつのことだったのかな」と昔の手帳を取り出しました。出てきた本やノート、手帳は、私を何10年か前の世界に引き戻し、私の仕事をストップさせました。

しかし、それは退職後の楽しい仕事でした。この原稿を書きながら、退職後の父が「あしあと」の執筆を楽しんでいた日々のことを思い出しました。

父は、昭和2年に奈良師範学校を卒業、小学校・国民学校と新しい制度の中学校に勤務し、その思い出をA5判・全4巻、1ページが44字18行、計760ページにもものぼる書「あしあと」にまとめています。そこには、大正デモクラシーの息吹の残る中での創造的な教育、国民学校令施行以後の国家総動員体制の中での小国民育成の教育、これま

でのすべてを否定することから始まった戦後民主主義の教育の中に生きた1教師のあしあとが述べられています。それは、自分史という言葉では済ますことのできない1つの教育論が盛り込まれたものです。実際、これをお読みくださった父がご厚誼いただいていた方々からもそのようなお話を頂戴しました。

この「あしあと」は、孔版技術では本職裸足の腕前だった父が、数種類のヤスリと鉄筆を使っていねいに製版し、新踏社の先代会長である安達友治氏の技術指導を得て、普通の謄写インクではなく活版印刷のインクを使って両面印刷し、本格的な製本をしたものです。

この書は、私にも大きな影響を与えています。同義ではあっても味わいの異なる用語を十分に吟味して使うことを習いました。自らの考えをまとめることの大切さを学びました。まだまだ不十分ですが、「文章を書くことが趣味の1つである」と言えるようになりました。

若いころから、NHK唱歌コンクール（現在の音楽コンクール）に燃え、自分が創作した子どもオペラを学芸会上演してきた父は、校長を務めていたときに体調を損ね、自ら降格を希望し、最後の勤務校では本来の音楽教師としての日々を送りました。学校を離れる日、「先生、もう一度先生の伴奏で校歌を歌わせてください」と音楽室にやって来た生徒といっしょに歌ったことが一番楽しかったと話していました。

私が、定年退職後の7年間を1理科教師として、再度教壇に立ち、その後も非常勤講師として理科の授業を担当しているのも、父から受けた影響のような気がします。

その父は、「あしあと全4巻の刊行をお祝いする会を開くよ」という旧友からの案内状が届いた翌日、こじらせた風邪が原因でこの世を去りました。これだけは前車の轍を踏まず、頼まれた週5時間の奈良

学園での授業以外は悠々自適の暮らしに切り換え、奈良県立教育研究所子育て支援講師、財団法人島岡教育基金家庭教育講演会講師、奈良県教育振興会理事・講師としての仕事を通して、少しでもご奉仕させていただければと考えています。

終わりに、校正を引き受け、自分では気づかなかった誤りを見つけてくれた妻や長男に感謝し、「表紙を考えてくれないか」という求めに「先生のお描きになった絵を表紙にされてはどうですか」と教員生活4年目の写生会で子どもたちと一っしょに描いた鉛筆画「長谷寺の秋」を使って表紙をレイアウトしてくれた生駒小学校の坂野耕二先生、この書の構成にアドバイスをいただき印刷製本を引き受けてくださった新踏社会長安達等さんに心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

平成15年10月

窓の外で遊ぶ子どもたちの元気な声を聞きながら

竹中 良行